

「心を縦に考へる」
初期倉橋惣三の自然主義と保育学構想

日隈脩一郎

“Thinking Mind Vertically”

Early Sozo Kurahashi’s Naturalism and his conception of research on early childhood care and education

Shuichiro Higuma

Author’s Note

Shuichiro Higuma is a PhD student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

The research was supported by a grant, Youth Scholar Program from The Center for Early Childhood Development, Educaion, and Policy Resercth.

Abstract

This paper examines the career and texts of Sozo Kurahashi (1882-1955), one of the founders and the first president of the Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education, up to around 1915, based on an interest in how the disciplines of pedagogy and study by childcare were formed in modern Japan. While conventional research has sufficiently discussed Kurahashi's theory of childcare, i.e., how he thought about and practiced the contents and methods of childcare, little has been done on how he thought about the nature of his research and what role he played in the various systems that regulated it. As a result of this study, it became clear that Kurahashi was expected to play a leading role in the field of psychology at that time, and was aware of his role as an introducer of psychology by actually being involved in the establishment of research groups and academic journals, and that he had a naturalistic view of children and a vision of the linkage of various studies centering on children. The fundamental theory and methodology of his vision was genetic psychology.

Keywords: Sozo Kurahashi, naturalism, play, genetic psychology

キーワード：倉橋惣三，自然主義，遊戯，発生心理学

「心を縦に考へる」

初期倉橋惣三の自然主義と保育学構想

1 はじめに

1.1 背景と目的

本稿は、近代日本において保育に関する学術的研究がいかにかその輪郭を浮かび上がらせようとしたのかを明らかにすることを目的とする。特に、1948年に創設された日本保育学会の初代会長・倉橋惣三（1882～1955）の初期のキャリアおよびテキストに着目し、保育学がいかなる条件によって可能になったのかということの史的前提を中心的な検討対象に据える。

保育にかんする歴史研究は、特に2010年代以降、保育研究のアイデンティ自体への反省的な問い直しという目的をもって進んできたように思われる。例えば戸健夫による一連の研究⁽¹⁾は、保育が行われる空間としての保育園、保育実践を支えるアイディア・思想を問題とする。あるいは「保育」という語そのものの意味、すなわち保育概念の歴史を検討した湯川嘉津美による詳細な研究⁽²⁾がある。ほかにも汐見ら（2017）や長江ら（2019）など、枚挙にいとまがない。

ただ本稿はあくまで保育学、すなわち保育に関する理論的探究それ自体の概念史の試みであるため保育というものがいかに定義され、どのように拡張され、あるいは縮減されたかということに強い関心を差し向けるわけではない。保育ではなく、あくまで保育の学知がいかなるものと観念・定義され、いかに伸縮したのかということその歴史に立ち返って問題にする。ひどく雑駁に言えば、保育学の中身ではなく、外から見た保育学の姿がいかなるものかを解明することを目指している。

しかし、保育学の学としての制度化ないし成立過程を追った研究を探そうとすれば、途端に暗雲が立ち込めてくる。近代日本、さしあたり1945年以前の日本で出版された著書で「保育学」の名を含むものを検索してみると、ハウ『保育学初歩』（坂田幸三郎訳、1893）、木下一雄『幼稚園実際の保育学』（1930）、和田実『実験保育学』（1932）、山本猛『幼稚園託児所保育学要綱』（1934）、和田実『保育学』（1943）に限られる。そのうちハウ（1930）は例えば第一篇が題して「恩物理論」であり、保育という名で呼ばれる指示領域の拡がりを自明視し、その拡がりを対象とする知識を「保育学」と名指しているように思われる。他書についてもやはり、「保育学」そのものが何かを問うような視点は乏しい。

こうした事情を踏まえたとき、本稿で倉橋に着目することは、それなりの理由がある。先にふれた通り、倉橋は日本保育学会の立ち上げ人にして初代会長であり、また、新憲法下で新たな教育制度を構築するために内閣の直屬機関として設けられた教育刷新委員会の委員にも名を連ねている⁽³⁾。敗戦後のキャリアを考えても、倉橋がそれ以前に日本の教育界およびアカデミアに対して持っていた影響力は無視できないどころか、きわめて強かったと言べきだろう。

1.2 先行研究

ただ、倉橋の保育論、つまり彼が保育の方法や内容をいかに捉えていたかについてはすでに膨大な先行研究の蓄積があるものの、いまだ保育学なるものがおぼろげな姿しか持ち得なかつ

た、あるいは教育学や心理学という領野におけるサブディシプリン、ないし個別の特殊研究としてしかみなされていなかったであろうと推測される時代に、保育を研究すること自体に関して倉橋がいかなる考えをめぐらしていたかということについては、十分な研究がなされているとは言いがたい。それは端的に、保育学自体についての（繰り返せば、保育自体についてはではない）体系的な論考が倉橋に存在しないように見えるからという事情を反映しているのかもしれないが、保育学とは何か、などと直截には論じていなかったとしても、保育に関する研究を彼がいかに観念していたかということは、探究の余地がある。

なお、倉橋の保育論を検討対象にしたものであれば、保育史研究と同様すでに蓄積がある。例えば森上（1993）は、その初期保育論の端緒を『婦人と子ども』誌上で倉橋が連載した「保育入門」（1914～1915）に見ており、森上の見立てを引き受けた上で、長井（2014）は「保育入門」に倉橋における唱歌と遊戯への基本的な考えの源を探っている。ほかにも湯川（2017）は、幼児教育の歴史に倉橋独自の位置価値を与える研究であるが、東京女子高等師範学校に倉橋が講師として赴任した1910年よりも後の業績を主たる検討対象としている。

1.3 方法

繰り返せば、本稿で問題にしたいのは倉橋がどういう枠組みに準拠しながら保育について考えていたのか、あるいは考えざるを得なかったのか、ということである。したがって、たとえ保育についての体系的なアイデアを先行研究の示す通り「保育入門」以降に見出せるとしても、あくまで本稿は、それ以前、つまり「保育

とは」と語り出すために倉橋が内的に課した、あるいは何者かによって課された条件が作動する時期に考察の範囲を狭める。

以上のような背景、あるいは先行研究の状況に照らして、目的に応じた方法を鍛えたとすればどうなるか。保育学の概念史研究（というよりも、一般にある固有のディシプリンの概念史研究）にはいくつかのアプローチがありえるだろう。ひとつは、制度論的アプローチである⁽⁴⁾。つまり、保育学という固有の営みを支えていると思われる諸制度、すなわち「保育」をその名に含む研究機関や学会等の学術団体、学術誌、法令などを参照しながら、それら多様な光源が放つ光の集積帯に「保育学」の姿を見るという仕方である。

とはいえ、上述のような広い意味での制度をすべて取り扱うことは筆者の力量の許すところではないため、本稿ではさしあたり1915年ごろまでをめぐり、倉橋のキャリアおよび関係した団体や学術誌等の沿革を簡単に振り返りながら、初期テキストを書誌学的に、文献学的に検討するものである⁽⁵⁾。

方法を研ぎ澄ますため、試みに学問を方法、参照する知識の対象領域、目的意識、規定的否定性の4つの要素から成ると考えてみると、倉橋の方法概念については例えば田岡（2019）を最近の研究報告として挙げることができるし、参照した知識については前述の通りある程度の量の受容史研究がある。してみると本稿は、目的意識および否定的規定性、すなわち、その研究がどのような目的に結びつけられているのかということに対する自覚、そしてそれは既存の学問分野といかに異ならねばならないと規定されているのか、ということの2点に主として照準を合わせることになる。むろん、それら4つ

の要素は厳格に峻別され得ないため、あくまで作業上の目安とならざるを得ず、したがって、自覚的であろうとなかろうと、前2者についてもふれることになる。

2 倉橋の足跡をたどる

2.1 倉橋の学歴と東京帝大心理学

ある個人の学問観にその人がたどった学歴が影響するということは、常識的に受け入れてよいだろう。したがってまずは、倉橋が所属した教育研究機関を中心にその生涯を振り返っておく。静岡県に生まれた倉橋は、早くに東京に移り、旧制東京府尋常中学校、旧制第一高等学校を経て、1900年に東京帝国大学文科大学哲学科に入学している。

初期の帝国大学（1897年に京都帝国大学が設立され東京帝国大学と改称）では、いまだ諸学が未分化であることもあって学科の再編が数年ごとになされるような状況であり、1885年には哲学、和文、漢文の3学科、翌年にはこれに博言学科を加えた4学科、翌1887年には7学科、1889年には9学科とめまぐるしい変化を見せる⁽⁶⁾。

1893年には、主として独仏の大学に倣った講座制が導入され、「教育学講座」などとならんで「心理学倫理学論理学第一講座」と「心理学倫理学論理学第二講座」など20講座が設置、心理学の名を冠する準組織が成立している。第一講座には元良勇次郎（1858～1912）が、第二講座には倫理学者の中島力造（1858～1918）がそれぞれ教授として着任しているが、両名は井上哲次郎（1856～1944）とともに帝大最初の日本人教員としてそれ以前にすでに在籍していた。

さて、心理学が独立の講座になるのは、実は大正7年、1918年のことであるが学科は1904

年に1889年来の9学科から哲学、文学、史学の3つになり、このとき哲学科に心理学専修課程が設置されて卒業論文が課されるようになっている。倉橋は、この新たに設置された心理学専修課程の独自のカリキュラムにしたがって1906年に卒業した第2期卒業生である⁽⁷⁾。

2.2 アカデミアにおける活動

倉橋の仕事のうち、初期に位置付けられるのが1909年の心理学通俗講和会の設立である。同会は、元良および福来友吉、京都帝大に心理学講座が設置された際の最初の専任教員となった東京帝大出身の松本亦太郎を顧問とし、いずれも東京帝大で元良より心理学を学んでいた倉橋、大槻快尊、ほか菅原教造、上野陽一の4人を常任幹事として創設された心理学の啓蒙団体であり、第1回の定期講和会は創設年の5月、東京帝大法医学教室で開催されている⁽⁸⁾。

この第1回での倉橋の講演題は「子供の嘘事」であり、子どもの嘘（反事実的発話）の分類と機能についての講演である。なお、倉橋の著作のうち、最初期のものにあたる「子供の嘘言」（雑誌『婦人と子ども』所収の記事）はこの講演に基づいたものである。同会は1919年まで続き、講演録は一部『心理学通俗講話』として第5集まで刊行されている。倉橋の「子供の嘘事」は第1集（72-104）に採録され、最後となった第5集に「こゝとの研究」が採録されている以外は、同誌に倉橋の講演録は見当たらない。

1912年には、この『心理学通俗講話』を引き継ぐ形で日本最初の心理学専門誌『心理研究』が創刊されたが、倉橋はここでも上述の講話会常任幹事らと創刊メンバーに名を連ねており、初期のキャリアを心理学者として、しかもかなり先導的な役割をもって過ごしている。なお、

『心理研究』の編者は「心理学研究会」となっており、会員資格には①正会員、②特別会員、③普通会員の3種があり、①は帝大で心理学を専攻した者、②は①に推薦された者、③は『心理研究』の購読者であった⁽⁹⁾。心理学研究者のコミュニティが現在のそれよりも狭く、限定的であったことを物語る規定である。

3 初期テキストの検討

3.1 総合学術誌の時代と『哲学雑誌』

明治初期にあつて、専門の学術誌がなかった19世紀末は雑誌が総合誌として多様な学術関係の記事を掲載するということが一般的だった。人文社会系諸学については、『明六雑誌』(1874年刊)⁽¹⁰⁾や『六合雑誌』(1880年刊)などが有名だが、心理学関係の記事も『六合雑誌』に掲載されたほか、『東洋学芸雑誌』(1881年刊)、『児童研究』(1898年刊)をはじめ専門誌を待つまでのあいだにその研究成果を世に問う機会があつた。なかでも、帝大文科大学哲学科の在籍者・出身者による学会組織である哲学会の機関誌として創刊された『哲学会雑誌』(1887年刊、1892年『哲学雑誌』と改称、以下『雑誌』と略記)は、現在でも刊行が続く学術誌で、今は狭義の哲学の学術論文しか掲載されていないものの、当時は心理学や倫理学、歴史学や経済学など、記事の種類は多岐にわたつた。

倉橋は、編集に関わつた『婦人と子ども』や前述『心理研究』を中心に論考を掲載しているが、この『雑誌』の239号(1907年)、268号(1909年)に倉橋の手になる記事がある⁽¹¹⁾。前者「精神本能説」は前述「子供の嘘言」よりも前のものであり、入手可能な公刊資料のうち最も古い倉橋の著作だと思われる。

「精神本能説」は、アメリカ心理学会の機関誌

に掲載された哲学者ジョン・ブーディン (John Elof Boodin, 1869-1950) の論文の抄訳である。内容は、認識におけるカテゴリーの基底性を進化論的観点から基礎づけようとしたものであり、そのうち、有機体は外界からの刺激や誘導を受けて精神の機能を発現・発達させるのであつて、精神はいわば本能であると述べている箇所を倉橋は訳出している。訳出箇所には、個体としての児童はまず個体発生の過程で「其祖先をコピー」し、生まれてからは生活の中で模倣を行う、つまり2段階のコピーによって精神の機能を発現させているという箇所が含まれ、倉橋が子どもへの言及に目ざとかつたようすをうかがわせるとともに、後の誘導保育論を予期させるものであると言える。

また、後者「児童の言語に就て」も倉橋のほぼ最初の論考と言えるが、この記事の中で倉橋はまず、子どもの使用する言語の研究には、①「声音学的研究」すなわち意味とは無関係に、音声の形態的性質そのものを扱う研究、②子どもの言語使用の起源と発達を問題にする研究、③言語使用を通じて子どもの精神状況を検討する研究、の大きく3つの種類・動向があることを紹介しつつ、①②についての検討を行う。詳述は避けるが、実際の観察に基づいて子どもが模倣や連想を通じて言語をまずは形態的に獲得していく過程、例えばAという単語がある概念(物)と結び付けられた場合、Aとして名指された物に付随する物もまたAと呼ばれていくような事例を興味深いものとして報告している。

これ以降、『雑誌』には倉橋の論考は見えず、また、『雑誌』自体に教育や子どもに関する記事の減少傾向を見てとれるが、20世紀前半に進行した専門分化の流れが反映しているものと見ることができらる。上の二つの記事から何事

かを結論したり仮定したりすることは難しいとはいえ、次節で検討する同時期の他の論考と見比べてみても、倉橋の関心がある種の傾向を帯び始めていることが確認できるかもしれない。

3.2 自然の形象としての子ども

倉橋が『婦人と子ども』および『心理研究』において発表した論考について、特に保育ないし幼児教育の原理について紹介・考察している箇所を中心に検討すれば、初期の思考が遊戯や言語、発達（倉橋の主たる用語法では「発生」とも）といった鍵語で特徴付けられるのが分かる。『婦人と子ども』誌の発行母体であったフレーベル会への入会の喜びを冒頭で表している記事「子供の想像」で倉橋は、幼稚園教育が抱える根本問題を「教育制度上の問題と保育法上の問題」に大別できると説く⁽¹²⁾。とりわけ後者、保育法上の問題について倉橋は言う。

……フレーベルの考えは実に立派なものでありますが、時代を経た今日の心理学及教育学を基礎として、考えれば、更めもし、補いもする必要のある箇所も少くありますまい。即ちフレーベルの理想を今日の進歩した学理を以て如何に完備のものたらしめるかという研究が必要と思うのであります⁽¹³⁾。

ここに、倉橋の保育研究への最初期の眼差しが現状認識、課題意識とともに看取できるが、この論考を手短に再構成すれば以下になるだろう。すなわち、一般に想像力は人間精神の一機能と思われているが、実は精神全体のはたらきであって、6, 7才の子どもにとってはその作用が顕著である。だからこそこの想像力とどう付き合うかが幼稚園教育上の課題となる。

なお、想像力には自然的なものと意図的なもの（倉橋の用語では「自発的想像」と「構成的想像」⁽¹⁴⁾）があり、子どもでは自然的な想像が優勢であるが徐々に意図的な想像もできるようになってくる。その過渡期において幼稚園教育に関わる者は、子どもの想像力に材料としての観念を適切に与えるべきである。想像力により素材としての観念が「豊かに且つ整頓されてゆく処に、いろいろの『子供の発明』」⁽¹⁵⁾が起こるのであるから。それは子どもの「発明」としての本性への支えなのである。

児童は終始発明をして居るのであります。吾々成人から見れば、つまらない何でもないことが、子供にとっては中々大発明であります。殊に教育上からいえば、発明の結果よりも其の経路に価値があるので、而して、その発明の径路なるものが即ち想像力の作用によるのであります⁽¹⁶⁾。

倉橋は以上のように、子どもに特徴的な様式の想像力を、教育者による素材の提示という仕方でも適当に導くという幼稚園教育のあり方を読者に示しているが、この想像力は「遊戯」の場面で端的に発揮されるから、ここに遊戯が介入の対象として問題化される必要が生じる。なお、倉橋は同論考の中で「人形遊び」「想像上のお友達」を例示しているが、前述の「子供の嘘言」における「嘘」とは、これら人形や友達に語りかけたりする発話をも含むものである。なればこそ、本稿では先に反事実的発話と換言しておいた次第である。

かくて倉橋において遊戯と言語は連関しているが、この連関の仕方はより微視的にはいかなるものであったのか。倉橋は「児童の遊戯に就

て」⁽¹⁷⁾という論考で、遊戯の問題が生物学や美学など、諸領域にわたる問題だという認識を示している。ということであれば、遊戯の問題は諸領域の学知を総動員して検討するべきであるということに論が進みそうであるが、本稿の関心から興味深いのは、倉橋がややもって回った言い方をする点である。倉橋は、これら多岐の分野にわたる「此の広い問題を特に児童の遊戯と云うことを中心にして一まとめにして一目の下にその大体の要点を了解する事は出来まいかと思つたのであります」⁽¹⁸⁾と、野心的な企てを示す。つまり、子どもの遊戯という対象領域において必然的に要請されるかぎりでの知識・手続きを用いると目論んでいる、すなわち既存の諸学の再構成への意図が確認できる。では、そのような要請がどこから発されるのか。

目をひかれるのは、同論考のなかでシラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759-1805) のいわゆる美的教育論が取り上げられている点だ。批判期のカント (Immanuel Kant, 1724-1804) が感覚の多様を受容する能力である感性と、表象を構成・分析する能力である知性とをいささか二項対立的に示したことをいかに統合的に捉え直すかが、カント以降のいわゆるドイツ観念論において問題にされたとすれば、シラーは感性と知性とが美への志向性、遊戯衝動 *Spieltrieb* によって媒介できると考えることで上の問題に応じようとした。倉橋は、特にシラーの『美育書簡』における「過剰の生活力」という概念に子どもの遊戯の起源を求めている⁽¹⁹⁾。すなわち「……皆生活上の欠乏がもとになって其の欲求を充たす為にばかり〔一見無駄に思える行為を〕為して居るのではない、左様の場合ならばそれは彼等の実生活上の仕事なのであるが、そういう真面目な目的がある

のではなし只其の充溢せる余力を漏らし自ら楽しむ為に斯かる事をして即ち遊ぶ」⁽²⁰⁾のである。

倉橋の理解によれば、スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) や ヴント (Wilhelm Maximilian Wundt, 1832-1920) はシラーの築いた論脈のうちで、遊戯の分化過程等を問題にした哲学者・心理学者だった。倉橋が子どもの遊戯を中心として諸学知の連関を構想していたのではないかということは先に仮説的に提示しておいたが、より踏み込めば、遊戯は自然の表出として倉橋に観念されていたのではないか。倉橋は論考の最後で、同時代アメリカの心理学者スタンレー・ホール (Granville Stanley Hall, 1844-1924) を取り上げておられる。例えば朝日 (1995) は、スタンレー・ホールが知覚と行為とを連続的にとらえたことと、いわゆる近代の「無垢な子ども」像とが親和的であったことを指摘しているが、「児童中心主義者」と呼ばれるときの倉橋の子ども像が、その思想史的源泉をシラーやスペンサー、スタンレー・ホールなど、おおまかに言って自然主義ないし自然主義哲学に求めていたことは重要だろうと思われる。同時代の心理学者、例えば倉橋が東京帝大で師事した元良をはじめ、そのほとんどが実験心理学の創始者たるヴントの影響下にあったことを踏まえれば、心理学者としてキャリアを開始した倉橋には、いわば「自然化された哲学」を齟齬なく受け入れる余地があった。そして、その自然の形象化されたものが、衝動としての想像を、言語を介し遊戯として発露させる子どもだったのである。倉橋にとり、子どもは自然の表出であり、なにかんづくその使用する言語の形態性は、自然性——物質性と換言してもよいだろう——の徴だと思われのではないか。そして、かかる見立てを倉橋がもっていたとすれば、カント哲

学に対してシラーが行ったような仕方で、事実性と規範性とを彼が連続的なものとして捉えたというのは想像しやすい。同論考の後編「児童の遊戯に就て（承前）」で、言語について、とくに早口言葉や転倒語、挿音語など、言語の意味論的性質ではなく、形質に着目しているのは、その傍証たりえるだろう。衝動としての想像、その自然のはたらきに突き動かされ言語という表現型を介して遊戯する子ども、こうした一体的な連関が倉橋の眼差しの先にあったものだとさしあたり言うことができる。

3.3 「心を縦に考へる」心理学

最後に、こうした基本的なモチーフをもった倉橋が、その初期において比較的広い視野から、心理学に対していかなる見方をもっていたか探ってみよう。『心理研究』に掲載された「教育の基礎としての心理學教授に對する希望」（1913）がそれである。倉橋は、心理学の役割が目的に依存するのは当然と断りつつ、師範学校教育において心理学は教育の基礎論として講じられてはいるが「……遺憾なことに、事實は理論上の所期に満足と與へて居ない。直言すれば、今日の心理教科の實際は教育の基礎として甚だ不満足のものである⁽²¹⁾」。したがって「問題はおのづから教育的心理學といふものゝ概念に向ふ⁽²²⁾」。倉橋がここで学の概念自体を明示的に扱おうとしているのは特筆すべきだろう。とはいえ倉橋自身は純正心理学や応用心理学といった語を弄して学問論を云々する気はないと断りながら、従来の教育学が以下のような問題を抱えていると指摘する。

即ち普通心理學を其の引例や結論に於て多少教育的に彩つてあるか、乃至興味とか記憶と

か、普通に教授の心理的基礎として考へられて居る類の問題を詳しくして他の問題を粗にせる位のことに過ぎなかつた。古いことは別として此の世紀の初めに入つて著はされた多くのものに於ても、銘は教育的心理學であつて、實は普通心理學と多く違ひのないものが多い。のみならず我國に多く出て居る所謂教育的心理學書（即ち多くは師範學校の教科書として著はされて居るもの）も亦、大體之れに類して居る。而して、その説いてある處は成人の心理である⁽²³⁾。

「成人の心理」を論じていながら、ところどころで概念をつまみ食いするだけのお手盛りとも言うべき、そうした教育心理学の幼児教育に対する非実用性を倉橋は問題視する。心理学がその実験の被験者を成人にしか求められなかった時代限定的なものであったらならばいたしかないし、心理学研究が教育のためだけに存在しているわけではないという実際上の問題もあると倉橋は述べて、とはいえ「教育的心理學は、普通心理學の概論を、教育向きに取扱つたといふ丈けのことで満足せらるべきものではない⁽²⁴⁾」のである。教育的心理学は、心理学一般と「全然組織も取材も違つたものであつてよいのである。教育的心理學は一層自由に、その目的（教育の基礎）のために最適切なる教材を選択すべきである⁽²⁵⁾」。

「希望」とあるように、倉橋の視座は「どこ迄も師範學校の心理學科を問題⁽²⁶⁾」とするものであつて、倉橋の役割意識が師範學校の教員、すなわち教員養成に現場で際会する実践家としての意識であることが端的に示されている。教育は、発生心理学と強力な関係を持つべきであり、純学問的関心よりも教育のためという目的

意識をもった実践研究が、児童の心理研究としてなされるべきであるにもかかわらず「……我國師範學校生の多數は教育の基礎として普通心理概論を學ぶのみで、最も直接に關係のある児童の心理に就ては、殆んど特に學ぶの機會なくして卒業して仕舞ふのである⁽²⁷⁾」。

教育の理論としては児童の教育法を教へ、教育の實際としては児童の取扱を教へ、而して心理學としては児童の心理を教へない（少くもそれを主としない）といふことは、論から言つても矛盾ではなからうか⁽²⁸⁾。

倉橋の心理学への強い思い入れを汲み取れる箇所であろう。むろん、師範学校においても「心の発達」を教えないことはない。「しかし毎週二時間一ヶ年の心理教授に於て他の多くの要目を終つて、此の最後の一項の爲に果して幾何の時間と説明とを費され得るか⁽²⁹⁾」疑問である。倉橋はここで、制度そのものへの批判的視点を持ってもいる。とはいえ、師範学校の制度上許された範囲では、心理学について概論のみを講じるにとどまらざるを得ず、発生心理学や児童心理といった「特殊論に及ぶこと難⁽³⁰⁾」しい、という意見があることに応えて、倉橋は、発生心理学ないし児童心理学は普通心理学における特殊論ではなく、つまり、一般に対しての特殊たることの差異ではなく「人間の精神を横に研究するか縦に研究するか⁽³¹⁾」でしかないという。倉橋はアメリカの心理学者ヤーキーズ (Robert Yerkes, 1876-1956) の『心理學入門』(1911) が「意識の記述としての心理學」と並べて「意識の歴史としての心理學即ち發生的記述」という章を設けている例を挙げながら、発生心理学と普通心理学を並列して扱うことが

心理学の最新動向だと紹介する。そして、これ以上は「或は心理學の體系に關する學問上の論になるから多く論じないが」と研究の枠組みそのものへの論及を再度自制しつつ、教員養成にあたって学ぶべきは発生心理学だと結論づける。ほかにも、児童心理研究に登場するテクニカルタームないし概念（倉橋は「学語」と記している）や体系は、心理学一般についての知識がなくとも理解可能であることを根拠として、改めて「學としての心理學概論の教授や、一般常識の養成を目的とする心理講義等は、茲には明かに別個の問題」として立て、「心を縦に考へる」教育的心理学を「理論上ではなく事實の上」に求め度いといふのが吾人の希望である⁽³²⁾と結んでいる。

4 おわりに

4.1 結論

倉橋が心理学界を先導する役割を強く期待される経歴を歩んだことは上述の通りである。そうした期待を背負って、彼は自ら論考発表の場となる媒体の創刊・編集に関与し、学知を作り上げること、普及させることにも自覚的に取り組んでいたものと思われる。

そうした自覚をもち、また、幼児教育の学問的基礎づけという課題に取り組んだとき、その照準が合わせられたのが子どもの言語行為として表出する遊戯だった。そこでは自然の傾向としての想像力が身体と結びつきながら、言語という像を結んでいる。こうした倉橋の子どもへの着眼の仕方が、自然主義とでも形容すべき態度に彩られていたこと、すなわち言語においてもその意味論的性格よりも形態論的性格に着目していたこと、そういった態度がシラー、スペンサーらの感性と理性を統合・融和せんとする

遊戯衝動あるいは余剰エネルギー概念の受容の土台にもなっていたであろうことは、本稿において示されたのではないかと思われる。

そして、学の構想史という本稿の関心からすれば、子どもの言語行為を中心として既存の諸学の再構成の道が開けることを倉橋が示し、人間の精神を「縦に考へる」発生心理学をその関連の要として見ていたことは、後の倉橋の保育学構想に連なるものだったのではないかと仮説的に結論づけることができる⁽³³⁾。自然としての子ども、その言語行為こそ、まさに倉橋保育学の源であり、発生心理学はその要であった。

4.2 課題と展望

倉橋以外にも戦前の保育学構想という点でみるべき論者、例えば城戸幡太郎(1893-1985)などがある。制度論的アプローチに関連して一言すれば、城戸は1940年代に入って、倉橋の教育方法を「教育科学」を奉じ手厳しく批判する。子どもの自発性、自然の傾向を重視する倉橋保育論への城戸の批判を借りながら、大宮(1980)は以下のように概観する。

自意識の未確立において子どもの純真性を認め肯定する倉橋理論は、国家によって規定される保育目的と何らの違和感なく接続する。……城戸における教育目的の科学的究明という課題意識は……教育する者の自由と国家支配の限定とを要求するものであった。と同時に、それは、教育方法を心理学によって基礎づけることに最大の努力を注ぐ、当時の「児童中心主義」がもたらす教育する者の主観主義、体制への従順性——城戸の規定する「方法なき教育」——を克服する中心的問題を衝いたものに他ならなかった⁽³⁴⁾。

教育者にとっての教育の自由と科学的実践を重視した城戸の批判、そしてその威を借りる大宮の整理には、いずれもやや時代がかったところがあり多分に一面的である。事実、のちに大宮は倉橋の初期論考「子供の想像」がすでに宿している制度へのまなざしに注目している⁽³⁵⁾。倉橋が1920年代に入って社会政策論を打ち出したり、教育法制そのものについて論じたりし始めるのは、教育の目的やそれと相関せざるを得ない制度について批判的な態度をもっていたからにはほかならないだろう。子どもをそのうちに埋め込んでいる社会や制度を自らの研究の体系上、倉橋がいかに位置付けていくのか、ということの本稿の延長上で考察することは、先行研究への十分な目配りも含めて、いまなお課題として残っている。また、先に制度論的な観点を示しておきながらも、本稿はそのアプローチの旗手を自任するものではなかった。こうした視角からなされたものとして、例えば湯川(2007)を参照すべきだが、本稿はこうした先行研究と有機的な連関を築くという課題も負っている。

Notes

- (1) 宍戸(1988-1989, 2014, 2017)。
- (2) 湯川(2015)。のち、日本保育学会編(2016)に採録。
- (3) 山内(2017)は、学校教育法に「保育」という語が残ったのは、倉橋の意向が反映されたものだとしている。
- (4) 制度およびその分析の視座は例えば青木(2008)や隠岐(2011)から示唆を受けている。
- (5) 湯川(2007)は倉橋も所属したふれーベル会に着目した保育制度史研究の一つの成

- 果である。
- (6) 以降、帝大・東京帝大文科大学・文学部の組織編成にかんする記述は東京帝国大学(1942)に、心理学史に関しては佐藤&溝口(2017)によった。
- (7) 同期には、のちに京都帝大教授になる野上俊夫、日本ではごく最初期の実験心理学についての書籍『実験心理学』を著した大槻快尊がいた。
- (8) 講話会の心理学というディシプリンに対して果たした役割については、中邑(1999)などを参照。
- (9) なお、1897年には京都帝国大学、1907年東北帝国大学、1911年には九州帝国大学が置かれていることに注意。
- (10) 河野(2011)は『明六雑誌』のメディア思想的分析の成果であり、心理学史研究にもその分析の視角自体は応用できるだろう。
- (11) 同誌については近年『哲学雑誌』のアーカイブ化を基礎とした近代日本哲学の成立と展開に関する分析的研究(基盤研究(B), 18H00603)(研究代表者:鈴木泉)による研究が進んでいる。なお、倉橋の1912年ごろまでの思想の形成を跡づけた桑原(1912)も、『雑誌』記事については言及していない。
- (12) 倉橋 1910a:9。なお、倉橋からの引用は送り仮名や仮名遣い、字体等を基本的に原文から変更せず、引用者による補足等は〔 〕で示す。
- (13) 同上。
- (14) 「構成的想像」は初出では「構造的想像作用」に「こうせいできそうぞうさよう」とルビが振られていたり「構想想像」と「的
- がなかったりと表記の乱れがある。
- (15) 倉橋 1910:15。
- (16) 同上。
- (17) 倉橋 1910b。
- (18) 倉橋 1910b:2。
- (19) 倉橋 1910b:3。
- (20) 同上。
- (21) 倉橋 1913:749。
- (22) 同上。
- (23) 倉橋 1913:750。
- (24) 同上。
- (25) 倉橋 1913:751。
- (26) 同上。
- (27) 倉橋 1913:753。
- (28) 同上。
- (29) 同上。
- (30) 同上。
- (31) 倉橋 1913:754。
- (32) 倉橋 1913:757。
- (33) 倉橋の1912年ごろまでの思想形成を跡づけた研究も、倉橋による邦訳記事の多くが心理学の学術誌からのものであることから「彼の研究関心が『心理学』に寄っていた」(桑原 1992:236)としているが、倉橋が発生心理学をそのほかの心理学と並列するものと捉え、方法論の核心としていたことを、単に心理学に興味を持っていたと言っただけで済ますことはできないだろう。したがって、発生心理学が倉橋の保育論を支えるいわば形而上学的前提であったことを示したことは、本稿固有の成果だと思われる。なお山本(2012)も、倉橋の教育思想を心理学から脱却・自然的なものへの志向と概括しているが、むしろ発生心理学と自然主義は当初から不可分な関係にあったと

評価すべきだろう。

- (34) 大宮 1980 : 135。なお、山下徳治がすでに1936年、倉橋の自然主義に対し「幼児の自然生活がどうして人間社会の歴史的創造の生活へ高められるのであろうか」(山下1936 : 438)と城戸と同様の疑念を抱き、さらに倉橋の発生心理学的視点の欠如と想像力軽視を難じている(同前 : 443-444)。しかし本稿では、少なくとも倉橋の初期の思考は後二者の批判を免れていることを確認した。なお、山下の批判を継承した野澤は、倉橋が「恩物教育法批判において、フレーベルが深い洞察の結果組織立てた対象的世界の認識の課題、すなわち幼児教育内容論をすっかりきりすててしまった経験主義を色濃く内包したものとなっている」(野澤1978 : 29)と断じているほか、前田(2010)も山下の独自の立場としての発生論的アプローチを強調しているが、倉橋への同時代的な評価、そして後代の評価がともに倉橋の経験論への傾斜を否定的なものとして捉えていることと、本稿で確認した倉橋の自然主義というのはどのように接続されるのかということはいまだ課題たりえる。一般に経験主義と自然主義は背馳しないことは一ノ瀬(2016)参照。
- (35) 大宮 1986。

References

- 青木昌彦(2008). 比較制度分析序説, 講談社.
- 朝日由紀子(1995). 子どもの発見 : G・スタンレー・ホルの「児童研究」をめぐって, アメリカ研究, 29, 77-94.
- 一ノ瀬正樹(2016). 英米哲学史講義, 筑摩書房.
- 大宮勇雄(1980). 城戸幡太郎の幼児教育制度論 : 戦前の「幼保一元化」動向をめぐって, 東京大学教育学部教育行政学研究室紀要, 1, 131-141.
- 大宮勇雄(1986). 近代幼児教育理論における「個性」の問題 : 倉橋惣三研究ノート(その1). 福島大学教育学部論集 教育・心理部門, 39, 39-53.
- 隠岐さや香(2011). 科学アカデミーと「有用な科学」 : フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ, 名古屋大学出版会.
- 河野有理(2011). 明六雑誌の政治思想 : 阪谷素と「道理」の挑戦, 東京大学出版会.
- 倉橋惣三(1907). 精神本能説, 哲学雑誌, 22(239), 100-104.
- 倉橋惣三(1909a). 児童の言語に就て, 哲学雑誌, 24(268), 89-104.
- 倉橋惣三(1909b). 子供の嘘言, 婦人と子ども, 7, 2-5.
- 倉橋惣三(1910a). 子供の想像, 婦人と子ども, 10(7), 9-16.
- 倉橋惣三(1910b). 児童の遊戯に就て : 日本児童研究會第一回講話會に於て, 婦人と子ども, 10(8), 2-8.
- 倉橋惣三(1910c). 児童の遊戯に就て(承前), 婦人と子ども, 10(9), 2-10.
- 倉橋惣三(1913). 教育の基礎としての心理學教授に對する希望, 心理研究, 18, 747-757.
- 桑原昭徳(1992). 倉橋惣三の幼児教育方法論前史 : 1912(明治45)年「森の幼稚園」までに, 研究論叢 芸術・体育・教育・心理, 42, 225-242.
- 佐藤達哉・溝口元(1997). 通史日本の心理学, 北大路書房.

- 汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治佑起・森川敬子 (2017). 日本の保育の歴史：子ども観と保育の歴史 150 年, 萌文書林.
- 宋戸健夫 (1988-1989). 日本の幼児保育：昭和保育思想史, 青木書店.
- 宋戸健夫 (2014). 日本における保育園の誕生：子どもたちの貧困に挑んだ人びと, 新読書社.
- 宋戸健夫 (2017). 日本における保育カリキュラム：歴史と課題, 新読書社.
- 田岡昌大 (2019). 倉橋惣三の「方法」：心理学的子ども理解と保育実践 (歴史研究分科会), 心理科学, 40(1), 78-79.
- 東京帝国大学 (1942). 東京帝國大學學術大觀, 東京帝國大學.
- 長井覚子 (2014). 大正から昭和初期の倉橋惣三における唱歌・遊戯論, 白梅学園大学・短期大学紀要, 50, 1-16.
- 長江侑紀・鈴木康弘・若林陽子・森田怜・戸高南帆・彦坂春森・福元真由美 (2019). 近現代日本の保育史研究の動向と課題：2007 年 2017 年の研究を中心に, 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 70(1), 73-89.
- 中邑平八郎 (1999). 明治時代の心理学研究(2) 「心理學通俗講話會」を中心として, 東亜大学研究論叢, 24(1), 1-21.
- 日本保育学会 (2016). 保育学とは：問いと成り立ち, 東京大学出版会.
- 野澤正子 (1978). 保育の内容と方法：倉橋惣三の誘導保育論と保育案の検討, 社會問題研究, 28(1・2), 23-41.
- 前田晶子 (2010). 山下徳治における発生論の形成(1)：成城小学校訓導時代を中心に, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 20, 153-160.
- 森上史朗 (1993). 子どもに生きた人・倉橋惣三：その生涯・思想・保育・教育, フレーベル館.
- 山内紀幸 (2017). 保育・教育思想事典 (増補改訂版), 勁草書房, 716-718.
- 山下徳治 (1936). 保育案問題を中心に：倉橋主事の教を乞ふ, 教育, 4(3), 27-41.
- 山本敏子 (2012). 倉橋惣三の「家庭生活の教育性」理論：近代の教育認識を乗り越えて, 駒澤大學教育学研究論集, 28, 19-47.
- 湯川嘉津美 (2007). フレーベル会の結成と初期の活動：演説, 保育方法研究と幼稚園制度の調査・建議の検討から, 上智大学教育学論集, 42, 21-43.
- 湯川嘉津美 (2015). 「保育」という語の成立と展開, 上智大学教育学論集, 49, 37-57.
- 湯川嘉津美 (2017). 日本の幼児教育史における倉橋惣三, 発達, 152, 8-13.
- Boodin, J. E. (1906). Mind as instinct, *Psychological Review*, 13(2), 121-139.
- Yerkes, R. M. (1911). *Introduction to Psychology*, H. Holt.